

第3章

これからのお寺づくりを考える

令和2年（2020）9月、第53回中央教化研究会議（以下、中央教研）は、過疎化が進む中で我々にはどのような選択を取りうるのか、その糸口を求めて、井出悦郎氏（一般社団法人お寺の未来代表理事）の基調講演（『現代宗教研究』第55号所収）が行われた。

今回の中央教研が開催された令和2年は、コロナ禍により人の動きに大きな変化が生じたため、過疎問題の前提から見直しが必要になることは言うまでもない。井出氏の基調講演の演題「withコロナ時代における寺院のあり方を考える」にもそれが表れている。

基調講演では、コロナ禍において訪れた特筆すべき変化について、主として人々の六つの志向性の変化が挙げられた。

- 安全・安定志向（命の安全・安心、変わらないよりどころを求める）
- 節約志向（出費を抑える）
- 本質追求志向（人生において本当に大切なものを考える）
- イエナカ充実志向（家での滞在時間の増加）
- 家族志向（家族・家庭を大事にする）
- 社会協調志向（社会のために）

さらに、志向性の変化に伴い、これまで若年層を中心に続いていた、首都圏への人口の流入超という状況が、令和2年7月に近年で初めて転出超に転じたことが挙げられ、コロナ禍を境とした人口移動を指摘した。これは、「都市部への人口集中」から、郊外の開疎空間の価値が高まっていく「開疎化」へのパラダイム・シフト（主に世代交代による認識・価値観の急激な変化）の一端であると井出氏は説明する。

こうした変化は、一見「過疎地域にとって追い風のように見える」人々の変化であるが、井出氏は、「過疎化が進展した根本の原因は、過疎地域が人をつなぎ止める求心力を失ったから」と、過疎地域が存続する難しさを指摘する。そうした前提の上で、「過疎地域寺院に求められる取り組み」として、

1. 自然の多様性の再生と共生
2. 地域の歴史的物語性の保全
3. そこでしか味わえない文化体験の提供
4. 未来（若者）への投資
5. 移住者と地域の縁つなぎ
6. 看取り・お骨の安心感

といった点を挙げた。この6つの点をまとめて、井出氏は、「地域社会の持続性に、どこまで寺院がチャレンジしていけるのかということです。そのためには、異端であることを恐れない取り組みが大切になるだろう」と総括した。

これらの点は、むしろ寺院としての根幹を捉えており、決して過疎地域に限られた指摘ではないはずである。コロナ禍によって訪れた社会状況の変化は、好まざる形ではあるが、却って宗教者が求められるような土壌も生み出しつつある。

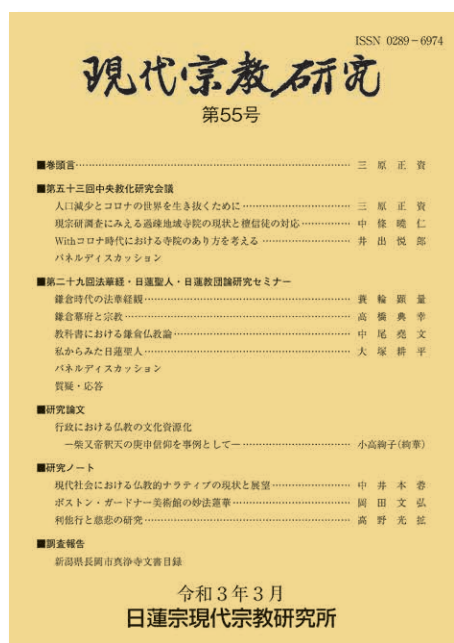
井出氏には、平成28年（2016）にも現代宗教研究所内でご講演（『現代宗教研究』第51号所収）をいただいたことがある。その際、現代のお寺・宗教界について、痛烈に無為無策であるとの問題点を列挙した上で、これからのお寺の必須条件を、

1. お寺の使命をふまえ、明確な課題意識と目標を持つ
2. 受け手の状況と、お寺への価値認識を知り尽くす
3. やってみなはれ（前向きに、とにかくやってみる）
4. 様々な思い・才能の縁繋ぎとなる
5. 葬式仏教の価値を再認識する

として、その講演の最後にこのように述べていた。

変化がない時代ってというのは、過去からの伝統が無条件で重んじられている、そういう社会ですね。格式、伝統、それに逆らっていく理由がないのです。しかし、変化の時代というのは、格式と伝統そのものが疑いの目を向けられ、継続性や永続性を保障する時代ではなくなってきました。変化の中に色々なチャンスも生まれてくる時代になってきます。

コロナ禍も含め、変化の大きな時代こそ、却って我々の足元を見つめ直す機会となる。無為無策であったり、様々な災害などを世の人々と同様に恐れ、「これまで通り」のことができないならと門を閉ざしてしまったりするのではなく、今こそ宗教者は何をすべきか問い直し、自分が何をもちたそうとし、何のために行動し、何を表現するのかを「選択」するべきだ——井出氏の言葉には、そう我々を叱咤する鋭さが垣間見えた。



『現代宗教研究』第55号
(日蓮宗現代宗教研究所／令和3年3月発行)



『教化学研究』第12号
(日蓮宗現代宗教研究所／令和3年3月発行)